

4. イエス・キリストの十字架とは？

「十字架」の形は、アクセサリーや文房具等あらゆるところで目にします。それは普通、美しい物としてとらえられています。時には、一人の男性が十字架にかかっているものを目にしますが、それはイエス・キリストと呼ばれる方です。十字架だけのもの、また、イエスが掛かっている十字架の両方とも、クリスチャンの象徴として知られています。教会では十字架があることが自然ですが、なぜ十字架はクリスチャン達にとってそれほど重要なのでしょうか？この起源は十字架の出来事よりもはるか以前にさかのぼり、アダムとエバが引き起こした人類の罪と、その罪に対する神様からの約束から始まりました。

「2.人間とは？」と「3. 罪とは？」で学んだように、人類の罪の性質は、神様と私たちとの関係の壁となりました。聖なる性質を持つ神様は、たとえ神様ご自身が人間と関係を持つことを望んでいても、墮落した罪ある人間と一緒にいることはできません。それでも神様は、私たち人間への愛をあきらめませんでした。神様がアダムとエバとの関係を断絶された時、「救い主」と呼ばれる方によって、神様と人間とを修復されると約束されました。(創世記3章15節)

人類が世界中に増え広がるにつれ、神様は特別に選んだ人々に、神様との関係を修復するという約束を思い起こさせました。これらの人々は単に超自然的な推測をしたわけではなく、これから来る「救い主」に関するメッセージを「預かった」、神様によって洞察が与えられた真の「預言者」です。どのような方を待ち望むべきか、その都度新しい情報を受け取りました。旧約聖書には「救い主」についての約束が300以上記録されています。

「救い主」に関するいくつかの重要な預言としては、以下のようなものがあります。

預言の内容	キリストが生まれる前	キリストにより成就された実際の出来事
救い主は、神の子である	ゼカリヤ書12章10節 詩篇2篇7節	マタイの福音書3章16-17節 ヘブル書1章2-3節
救い主は、処女によって生まれる	イザヤ書7章14節	ルカの福音書1章26-31節
ベツレヘムの地で生まれる	ミカ書5章2節	マタイの福音書2章4-6節
救い主は、罪のゆるしのための供え物となる	イザヤ書52章15節-53章5-12節 詩篇40篇6-8節、マラキ書3章3節	ヘブル人への手紙9章12節
救い主は、木にかけられて死なれる	申命記21章22-23節	第一ペテロの手紙2章24節 ガラテヤ人への手紙3章13節
救い主は、死からよみがえる	詩篇16篇	使徒の働き13章33-35節

これらの預言は、その救い主が誕生する何百年、何千年も前に書かれたものです。それらは場所、時間、またどの家系に救い主が誕生するかなどが具体的に記されていて、全ての人類の歴史の中で、そのすべてに当てはまるのは、ただ一人、イエス・キリストと呼ばれる方なのです。

しかし、もし救い主が勝利をもたらす英雄なのであれば、なぜ十字架で死ななければいけなかったのでしょうか？その答えは、キリストによる罪のための供え物に関する預言の中にあります。

人間は自分を清くするために、捧げものをささげたり、清めの洗いや、唱えたり、多くのことを試してきましたが、一度墮落した人間が自分の力で真に汚れや恥のないものに再び戻ることは不可能なのです。私たちが何を捧げたとしても、最善の行いが周りの人々の目に善いものとして映っても、それらは神様の前では不十分なのです。

私たちにとって必要なものは、神様の目に受け入れられる完全な供え物を捧げてくださる方です。それは、罪や恥が全くない神様のような方です。神様はそのようなことができる人間は誰一人いないとわかっておられました。それゆえ、神様はご自分の愛する子を天から地へ送りました。その方がイエス・キリストです。イエスは人間として生まれ、聖い生活を送り、全人類の罪のゆるしのために、私たちの代わりに聖なる捧げ物としてご自分のいのちを与えたのです。

第一ヨハネの手紙2章2節

「この方こそ、私たちの罪のための、いや、私たちの罪だけでなく、世全体の罪のためのなだめのささげ物です。」

イエス・キリストの十字架の死によって、罪と恥の問題はなくなりました。神様と人類を引き離していたものは、神ご自身によって解決されました。ここに、神様がどれほど私たちとの親密な関係を望んでおられるかを知ることができます。なぜなら、今も永遠においても、私たちが神様と再び結ばれるために、神ご自身のひとり子さえも惜しまず、十字架の死に渡されたほどに私たち人類に愛を示されたからです。

ローマ人への手紙 8章32節

「私たちすべてのために、ご自分の御子さえも惜しむことなく死に渡された神が、どうして、御子と共にすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがあるでしょうか。」

私たちは自分のためにそのような素晴らしいギフトを受け取ることは簡単なことではありません。なぜイエス・キリストは死ななければならなかったのでしょうか？他に方法はなかったのでしょうか？日本では日常の生活に似たようなことがみられます。私たちは食事の前に、その食物に対して「いただきます」と言います。食料はあらゆる植物や動物の命を絶つことからなり、それら命をもって、私たち自身が飢え死にすることを免れるからです。食物の命を受けとるからこそ、私たちは生きることができるので「いただきます」と言います。この慣習には聖書が語っている犠牲の必要性について不思議な共通点があります。それは、このことがまさにイエス・キリストを指し示しているからです。もしイエスが死ななければ、私たちは新しい命を受けることが出来ません。食物は先に死ななければいけないということは悲しいことですが、私たちに生きる力を与えてくれる素晴らしい食事には喜びがあります。同じように、イエスが十字架にかかれたことは悲しいことですが、そのことによって私たちに計り知れない喜び、美しさ、また命すらも与えてくれます。

第一コリント人への手紙 15章22節

「アダムにあってすべての人が死んでいるように、キリストにあってすべての人が生かされるのです。」

処刑の道具であった十字架は、美しさを表すものとなりました。教会や聖書には十字架が描かれたり掲げられたりします。かつては罪の結果である「死」を表すものでしたが、今ではアクセサリー、文具、また画像などにも、イエス・キリストが成し遂げられた業の結果、「いのち」を意味する「十字架」が用いられているのです。

ここまでの学びを通して、イエス・キリストの十字架が、どのようにして救いの道をもたらしたのか学ぶことができました。しかし、どのようにして私たちは自分自身がその救いと神様が約束された命を持っている、とわかるのでしょうか？ 次回の「5. 救いとは？」でそのことを学んでいきます。

